ピアエデュケーションの手法を用いた飲酒防止教育の研究
－大学生へのアルコールハラスメント防止教育を通して－

所属校：東京都立六本木高等学校
氏　名：齋　　藤　　千　　景
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：ピアエデュケーション・大学生・アルコールハラスメント

Ⅰ　研究の目的

高校生を対象とした調査では、飲酒経験が 7 割に達しており、高校生にとって飲酒はめずらしい行動ではないと言える。大学生の調査では、月に 1～2 回の頻度で飲酒をしている者の割合が 50～90%を占め、高校生よりさらに、飲酒行動が活発になっている。青少年の飲酒は喫煙や薬物使用等の他の危険行動の入り口としてとらえられており、飲酒防止教育を行うことは、包括的な危険行動を防止する上でも重要であると言える。さらに、未成年から飲酒している者が大量飲酒やアルコール依存になる可能性が高いとの報告もあり、その意味においても、飲酒行動が活発になる前の青少年に飲酒防止教育を実施することは重要であると言えよう。しかし、アルコール教育の実態に関する全国調査では、高校の飲酒防止教育の実施率は 76%であり、取組みが遅れていることが示されている 。教育方法は「講義・講演」、次いで「視聴覚教材活用」と「資料活用」で９割を占め、多様性や新しい方法の導入が求められている。一方、厚生労働省が、思春期保健対策の強化と健康教育推進のために、ピアエデュケーション（仲間教育）の取り組みを提言したことを受け、ピアエデュケーションが各地の保健所や学校を拠点に普及されつつある。しかし、その内容はエイズ教育や思春期の性に関する教育が多く、他の健康教育の手段の報告は未だ少ない現状である。そこで、今回、ピアエデュケーション手法を活用した飲酒防止教育を行い、その効果を検証することを目的に研究を行った。

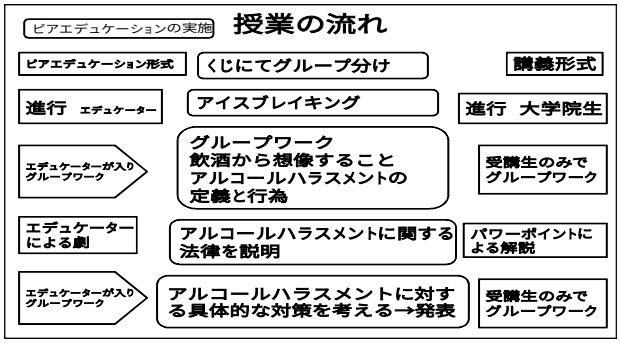
本研究は研究１と研究２の二部構成である。

研究１はピアエデュケーションの手法を用いて、飲酒防止教育を実施するに当たり、大学生の飲酒行動の実態と課題を明らかにすることを目的とした。研究１の結果を受けて、研究２は、ピアエデュケーションの手法を用いてアルコールハラスメント防止の保健学習を大学生対象に実施し、その効果を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ　研究の方法

研究１では、大学生を対象に、飲酒の実態、意識、知識について、インタビュー調査とアンケート調査を実施した。インタビュー調査は、５グループ 19 人を対象に、「飲酒の良い点」、「飲酒の悪い点」、「飲酒防止教育において学ぶべきこと」について実施した。分析はインタビューを録音し逐語録を作成し、その中から、飲酒に関する表現を、文脈を損なわないように抜き出しコード化した。アンケート調査は、G大学の学生 224 名を対象に集合検査法で無記名式の自記式質問紙調査を実施した。倫理的配慮として、インタビュー調査、アンケート調査時には、学生に調査の趣旨を説明し同意を得た。

研究２では、はじめに、ピアエデュケーションを行うために、エデュケーターの養成を行った。研究の説明と同意を得て募った大学４年生 13 人に対し、90 分×５回のエデュケーター養成を行った。その後、主に大学１年生が受講する授業を２群に分け、一方はピアエデュケーション形式で、もう一方は、大学院生一人が講義形式で授業を行った。授業の流れを図１に示す。倫理的配慮として、授業を行うに当たり、学生に対して趣旨を説明し、授業介入の同意を得た。



【図１　授業の流れ】

ピアエデュケーションの効果を測定するために、受講生に対して、① 授業の評価を「知識・理解」「意欲・関心・態度」「思考・判断」の観点による自己評価、② 授業前後にアルコールハラスメント尺度の調査、③ 授業の感想文記入、を実施した。④ グループワークの意見の量と内容を模造紙の記録とビデオにより抽出し、カテゴリー化した。

Ⅲ　研究の結果

１　研究１の結果

(1) インタビュー調査

① 分析の結果、コード数 80、サブカテゴリー数 16、カテゴリー数８に分類できた。飲酒の良い点は【ストレス解消】、【大人への仲間入り】、【交流の手段】に、悪い点は【社会の規範の低下】、【危険な飲酒行動】、【アルコールハラスメント】、の 3 つのカテゴリーにまとめられた。特に【アルコールハラスメント】はコード数が一番多く、[下の立場は弱い]、[自分が盛りあげなければと思う]、[飲ませるのが楽しい]、[見ても止めない]、[アルコールの特異性]、の 5 つのサブカテゴリーにまとめられた。

② 飲酒の理由の個人的な要因、社会・文化的な要因を縦軸に、飲酒の良い点と悪い点を横軸にしてカテゴリーを整理すると、カテゴリーは個人的な要因よりも、社会・文化的な要因として多く示された。

(2) アンケート調査

① 大学生の 57%は月に１～２回、16%は毎週末に飲酒していた。飲酒量はコップ 3～5 杯が 43%であった。84%は友人と飲酒しており、イッキ飲みは 76%の学生が経験していた。イッキ飲みの経験は男子の方が、女子に比べて有意（p＜.001）に高かった。

② アルコールハラスメント尺度（11 点～44 点）の得点は、平均±標準偏差＝22.3±6.44 であり、飲み会の嫌いな程度と有意な相関(r=-.28 p＜.01)がみられた。

③ 飲酒に対する意識は因子分析の結果、第Ⅰ因子「飲酒は交流するために必要」、第Ⅱ因子「飲酒はストレス解消に必要」、第Ⅲ因子「お酒は断れない」、第Ⅳ因子「飲酒をコントロールできない」、で構成された。これらは、第Ⅳ因子以外を除き、全て因子間に有意な相関関係（p＜.01）がみられた。又、アルコールハラスメント尺度得点と各因子の全てに有意な相関（p＜.01）がみられた。

２ 研究２の結果

① 受講者による授業評価は「意欲・関心・態度」「思考・判断」に関しては２群に有意差はみられなかった。

② アルコールハラスメントへの容認度の変化を２元配置の分散分析で比較した。２群とも被験者内の効果が見られ、授業前より授業後が有意に点は低く、介入の効果が示された。しかし、被験者間に差は見られなかった。

③ グループワークにおける意見は、ピアエデュケーション形式群が講義形式群より、意見数も多く、内容も「環境への対策」「人に対する対策」「規範意識」のカテゴリーにおいて、均一に出されていた。

Ⅳ 考察

研究１の結果から、大学生にとって飲酒は身近な行動であり、イッキ飲みは多くの学生が体験していること、8 割の学生が友人と飲酒しており、飲酒をする理由が仲間と仲良くなるための交流の手段であること、イッキ飲みの背景には、アルコールハラスメントが行われていること、アルコールに関する基礎的な知識があるにもかかわらず、自分達が行っている行為がアルコールハラスメントであるという意識が不足していることが示唆された。

そこで研究２では、大学生を対象に、アルコールハラスメントをテーマとした保健学習を、ピアエデュケーションで実施し効果を検証した。ピアエデュケーション形式群は、グループワークにおいて、意見の数も多く、内容も多岐にわたり、活発に意見交換がされていたことから、受講者はアルコールハラスメントを自分達の問題として考え、認識が深まったと言える。仲間の中で行われている飲酒行動やアルコールハラスメントについて、ピアエデュケーションを活用して考えさせることは、自分達の問題として意識させ、考えさせることに有効であった。とりわけ、ピアエデュケーションの効果として、エデュケーターが緊張している受講生に対しリラックスした楽しい雰囲気を作り意見を引き出す役割をしていること、エデュケーターがグループワークにおいて、受講生と同世代の仲間としてのロールモデルの役割を果たしていること、が示唆された。

さらに、エデュケーターから、知識が増えた、充実感や達成感があった等の感想もあり、エデュケーターの成長も推測された。今回は対象者もエデュケーターも大学生であったが、高校生や中学生を対象に大学生がエデュケーターになったり、高校生や中学生を対象に、高校生がエデュケーターになったり、テーマによって、色々なバリエーションが考えられる。海外では、ピアエデュケーションは様々な思春期の健康問題の学習に利用されているが、日本においては、エイズや性に関する学習の報告がみられるのみである。今回アルコールに関する学習において、ピアエデュケーションが活用できることが明らかとなったことで、今後思春期における様々な健康問題の学習に活用できる可能性が示されたと言える。